

近代数寄者の住宅 郊外・移築・田舎屋

高橋箒庵著『東都茶会記』の記述をもとに

土屋 和男

1. はじめに

近代和風住宅の形成において、近代数寄者と呼ばれる人物たちが果たした役割の大きさはよく知られている。近代数寄者の茶会等の交流は¹、しばしば普請道楽とも言える和風住宅や別荘で行われたが、それらの交流を行う建築物やその場所の景観は茶題や催しの性格とも関係し、彼らの趣味を示す上で重要な意味があった。近代数寄者の多くは実業家や明治維新の功労者、旧大名家の当主などで、財力があると同時に文化のリーダーを自認する彼らは、茶会等を行う場所やその景観の歴史的、文化的な意味に詳しく、一方で欧米の近代住宅地に関する情報にも明るかった。彼らにあっては、特に茶会等を行う場所となる住宅や別荘の敷地と建物を、きわめて吟味した上で選定し建設する財力と情報を持ち合わせていたといえる。近代数寄者はその住宅建設にあたって、率先して近代化を享受し、郊外に住宅を建て、鉄道を利用した別荘を建てた一団である。

本稿では、高橋箒庵著『東都茶会記』の記述に基づいて、近代数寄者の住宅と別荘の所在を示した後、近代化が和風住宅の建築に与えた効果を確認しつつ、近代数寄者の住宅に見られる建築的な特徴を考察する²。このことは、数寄者と呼ばれる当時の富裕階層のすまいの傾向を知ることであり、それは当時のすまいの理想型の一端を知ることにつながると思われる。

1 「近代数寄者」は、熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980によれば次のように記されている。「財・政・官界に大きな力をもつ近代ブルジョアジーの一群であり、彼らはあくまで趣味として茶を楽しみ、その巨大な財力にまかせて茶道具を蒐集し、独自の茶風を切りひらいた。」(193頁)「近代数寄者」は狭義には近代において茶の湯を趣味とする人々と考えられるが、後述するように、『東都茶会記』には茶会以外の催事や、茶の湯はやらないが彼らと趣味を共有する人々との交流も多数取り上げられている。本稿では、富裕階層のすまいの傾向を知るという目的から、「近代数寄者」を「財・政・官界に大きな力をもつ一群」ととらえ、茶の湯以外の催事や交流も含めて「茶会等」として論考の対象とする。

2 本稿は、拙稿『東都茶会記』に見られる近代数寄者の住宅の所在と立地』『日本建築学会計画系論文集』601号、2006、191-197頁での論考の一部を継承、発展させ、大幅な加筆を行ったものである。

なお、高橋箒庵の記録は、熊倉功夫氏らによる新装版の刊行³が行われ、本稿はこれに依っている。

2. 近代数寄者の時代

(1) 近代数寄者の交流と『東都茶会記』

近代数寄者、高橋義雄（号は箒庵、以下、高橋箒庵と記す）は『東都茶会記』、『大正茶道記』、『昭和茶道記』、『萬象録』等の膨大な記録を残しており、さまざまな住宅や別荘を訪れたことが記されている。これらは近代和風住宅の所在、建築主の生活観、風景観を知る基礎資料ととらえることができる。

高橋箒庵（1861（文久元）年－1938（昭和13）年）は、水戸藩士の子として生まれ、慶應義塾を卒業後、時事新報を経て洋行し、帰国後、三井銀行、三井呉服店、王子製紙など三井系の実業界に身を置いた人物である。1911（明治44）年、51歳で実業界を引退した後、趣味の茶道に専念し、実業界で培った人脈をもとに連日のように茶会に出席し、その様子を伝えるスポークスマンの役割を果たした。

『東都茶会記』は、1912（明治45）年2月から「時事新報」紙上に連載されたもので、その後ほぼ1年ごとにまとめて著書として出版された。全7輯13冊にわたり、1919（大正8）年12月までの記録が収められている。『東都茶会記』は新聞紙上に発表されたことにより、限定されて行われる富裕階層の交流の動向を、マスコミを通じて喧伝する効果があり、同時代の文化的動向にもたらした影響も大きかった。この効果を熊倉功夫は、「本来密室的な茶事の世界が、一気に不特定多数の観客の視線のもとにひき出され、もつとも私的な世界であるべき茶の話題が、いわば社交界共通の話題にうつしかえられるという事態をもたらした」⁴と述べている。数寄者の交流、行動が1週間に6日間⁵、新聞紙上に掲載されていたのである。

表1に、『東都茶会記』に現れる代表的な近代数寄者を示す。彼らはほとんどが、明治中期から昭和初期にかけての近代化の渦中であって、財・政・官界の要職にあった人物である。彼らは互いが主客となって茶会等を行ったが、この交流を通して富裕階層の住宅地、別荘地の情報交換、斡旋等が行われたこともあったと推測され、これらの交流はいわば理想的な近代和風住宅の形成の源となる出来事であったといえる。

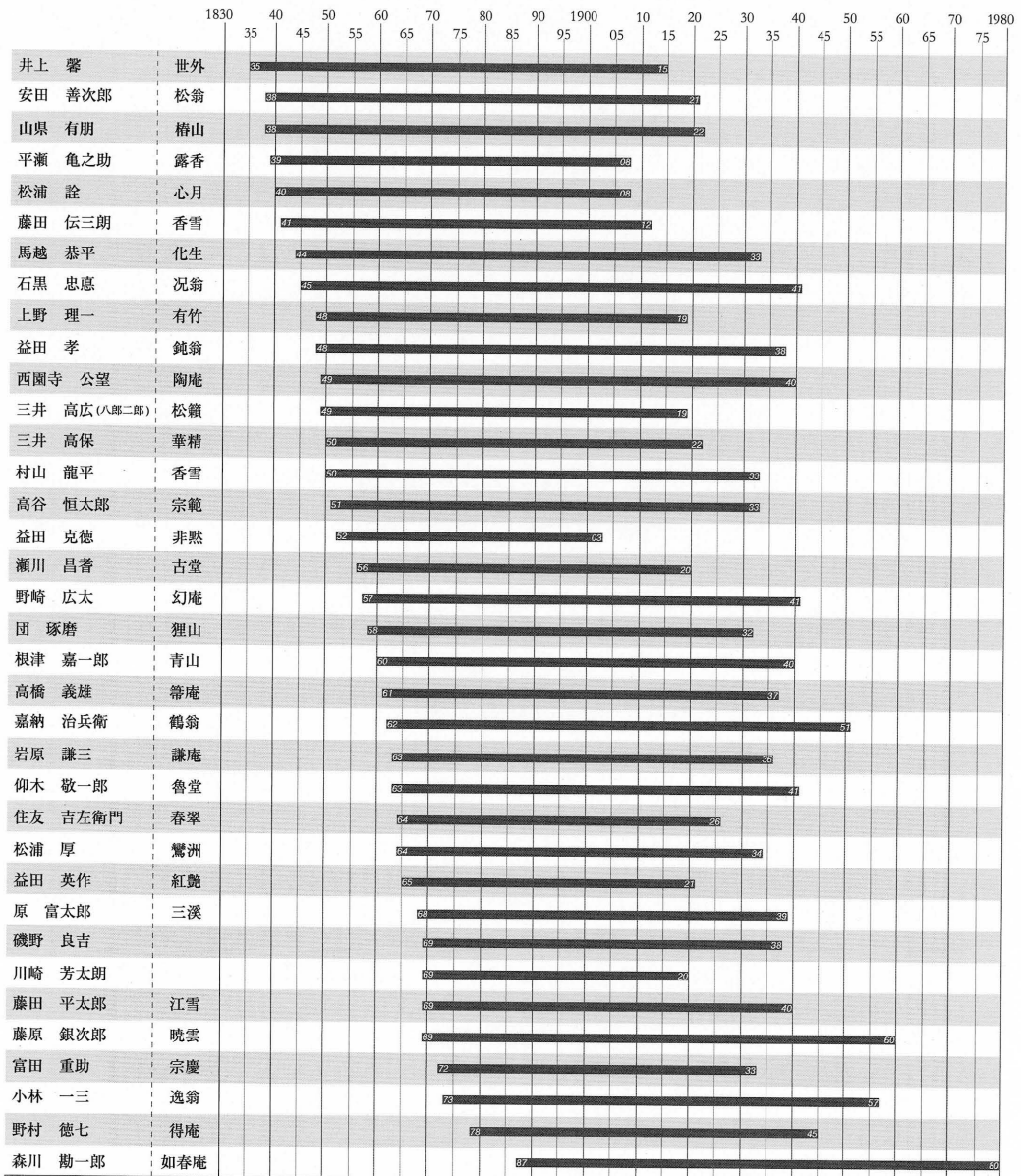
近代数寄者たちは所有する道具立てを見せ合ったが、それは彼らの財力とともに目、す

3 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』全5巻、淡交社、1989および高橋義雄『萬象録』全8巻、思文閣出版、1986-91

4 前掲『近代茶道史の研究』261頁

5 前掲『萬象録』第3巻、140頁（大正4年4月16日）

表1 『東都茶会記』に現れる代表的な近代数寄者（『東都茶会記』の注記等から作成）



なわち知識と美意識を仲間に見せることだった。客に興味を見せるということは、道具や書画にとどまらず、空間体験にも及んでいた。それは茶会等が催される座敷にはじまり、作庭、さらにその先に見える景観も含んだものであった。いかなる場所にいかなる建物を建て、いかなる景観を見せるかが彼らの趣味の見せどころであった。彼らが土地と建物を選ぶ視線は、客を招いたときの視線であり、いいかえれば客として見た視線である。こうした客観的な視線はさらに、自らの趣味を公の文化と認知させることにつながってゆく。高橋箒庵の残した膨大な記録を前にすると、これらの記録を残そうというその行為自体に、

自分たちのやっていること、自分たちの趣味を公のものにとらえていたことが現れている。

近代数寄者の趣味が成立したのは、維新後、大名の遺産が売り立てられたことや、廃仏棄釈で仏具が流出したことが背景にあるが、彼らはそれらを目利きとして品評した。こうした目が、茶の湯の床飾りに曼陀羅や仏像を置くような革新性を生み⁶、信仰の対象であったものを脱宗教化し、それらの価値を相対化し、商品として流通可能なものとした。伝統的工芸や演芸を芸術化したのも彼らによる部分が大きい。例えば、1887(明治20)年に井上馨(世外)が茶会に天皇を招き、はじめて歌舞伎を見せたことは、自らの趣味であった芸能の正当性を権威によって保証したという点で、歴史的意義を持つことがしばしば指摘される⁷。この天覧歌舞伎の御座所は後に興津(静岡市清水区)にあった井上の別荘内に移築された。彼らの行いが、すなわち文化財を形で示すこととなったのである。

そして、近代数寄者の趣味は、茶会等を催す建築物と景観において最もダイナミックに表現されたのではなかったろうか。大規模な民家を移築した田舎屋での茶会や、小田原の益田孝(鈍翁)邸や興津の井上世外邸といった別荘で見られるような、両側を山に囲まれ正面に海を見渡すといったパノラミックな景観は、近代化によるロジスティックスや景勝地への交通によって得ることのできたダイナミズムにほかならない。

(2)『東都茶会記』に見られる近代数寄者の住宅

『東都茶会記』には、著者自身が「広義の茶道」として述べる⁸、新装版の校注者、熊倉功夫の解説にも述べられているように⁹、茶会記だけでなく、美術品や庭園の鑑賞・それらにまつわる懇談、史跡や工房巡りの旅行記・滞在記、園遊会等の催し、さらに随筆の部分とが混在している。人物でいえば、茶人ばかりではなく、茶人ではないが箒庵と趣味を共有する人々との交流も多数取り上げられている。これらのうち、随筆以外の、日時と場所および箒庵と出会った人物が記述から特定できる催しや交流を茶会等と考えると、『東都茶会記』に記された茶会等は全部で295件である¹⁰。これを地方別に見ると、東京・東京郊外および東京の別荘地200件¹¹、京阪神およびその別荘地37件、名古屋市内10件、金沢市内15件、その他の地方33件¹²となっている。茶会等の行われた場所を建物種別で分類すると、住宅本邸186件、住宅別邸47件、寺・史跡・工房等27件、美術倶楽部等

6 熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』河原書店、1997、241頁

7 熊倉功夫「高橋箒庵と近代数寄者」『近代の数寄者：淡交別冊』淡交社、1997、35頁

8 前掲『東都茶会記』第2巻、213頁

9 前掲『東都茶会記』第5巻、397頁

10 同所、同主人で連日に行われた茶会は初日のみ1件としてカウントした。同日、同敷地内の複数の茶室で行われた茶会は主要な1箇所のみカウントとした。

11 東京、京阪神の別荘地とその他の地方との境界は、当時の別荘地の形成から判断した。当日中に鉄道で往復可能なことを目安とし、東京では湘南、東海方面で、興津がもっとも遠い。京阪神では京都郊外と六甲南麓である。

12 名古屋、金沢は市内のみをカウントし、それらの地方都市の郊外はその他の地方としてカウントした。

14 件、料理屋等 15 件、景勝地の旅館 6 件となっている。

住宅（本邸および別邸）は、全件数に対して約 8 割を占めており、茶会等の舞台として住宅がメインであることが数量的に把握できる。このうち東京・東京郊外および東京の別荘地の住宅と、京阪神およびその別荘地の住宅を所在地ごとに見ておこう¹³。

・東京・東京郊外（表 2）

東京・東京郊外の住宅 48 箇所は所在地によって次のように分類できる。まず東京市内と市外に分かれ、さらに地形に着目すると、市内は山の手の台地と下町の低地とに分けることができる。このことは、地形によって庭の形状や景観（水を引けるか、起伏があるか、眺望が遠いかなど）が変化することを念頭に置いたものである。

東京市内は台地が 22 箇所、低地が 18 箇所である。

東京市外は 8 箇所、例外的な横浜本牧を除くと、すべて西郊の市内山の手の延長上の台地である。これらの場所は東京市の周辺に位置し、次第に市街化しつつあり、まとまった土地を得られた、市内に準ずる場所と考えられる¹⁴。

台地にある住宅の立地には際だった特徴が認められる。すなわち、そのほとんどすべてが敷地内に斜面を有しているか崖上にある。敷地内高所に屋敷を配し、斜面に庭を設け、さらにその先の眺望を得るというのが、一般的な配置計画である。

表 2 東京・東京郊外における住宅

所在地	所有者、住宅名	茶席名
東京市内の台地にあるもの		
富士見町	三井松籟邸	
麹町上二番町	三井華精邸	小柴庵
麹町五番町	山県有朋邸、新椿山荘	
駿河台西紅梅町	瀬川古堂邸	
白金三光坂	森下岩楠邸	坂中庵
麻布内田山	井上世外、勝之助邸	八窓庵
麻布内田山	岩原謙庵邸	
麻布鳥居坂	三井守之助邸	
麻布本村町	三井養之助邸	
麻布飯倉	藤波言忠邸	
青山	根津嘉一郎邸	無事庵
赤坂一木町	高橋箒庵邸、伽藍洞	一木庵
赤坂表町	福井菊三郎邸	
赤坂新坂	竹内寒翠邸	順春軒
赤坂日枝神社	越沢宗見所有、星岡茶寮	
四谷伝馬町	高橋箒庵邸、天馬軒	白紙庵
四谷鮫ヶ橋	松平直亮邸	明々庵ほか
牛込矢来	酒井忠道邸	
目白	山県有朋邸、椿山荘	
本郷	浅野長之邸	
本郷湯島	高田慎蔵邸	
湯島三組町	武井守正邸	
東京市外の台地にあるもの		
品川御殿山	益田鈍翁邸、碧雲台	応挙館、幽月亭、太郎庵、為楽庵ほか
渋谷羽根沢	野崎幻庵邸	幻庵、葉雨庵
千駄ヶ谷原宿	団琢磨邸	鼓腹亭
千駄ヶ谷原宿	松原瑜州邸、碧雲荘	明々庵
目黒	恵比須ビール製造所構内	又隠（写し）
目黒	益田紅艶邸	明日庵
大森	間島与喜邸	
横浜本牧	原三溪邸	聚楽時雨亭、松風閣、蓮華院
東京市内の低地にあるもの		
内幸町	伊丹元七邸	
永田町	中村作次郎邸	宝池庵
京橋区南鞘町	仰木魯堂邸	喫茶去庵
三十間堀	益田紅艶別邸	
築地	益田鈍翁別邸	明石庵
築地	藤堂四州別邸	
芝桜川町	馬越恭平邸	桜川茶寮
麻布新網町	藤原銀次郎邸	曉雲庵
牛込揚場町	石黒祝翁邸	帰雲亭
上根岸	大久保北隠邸	二覚庵
根岸	吉田楓軒邸	松雨亭
根岸	山澄宗澄邸	隣鐘庵
浅草向柳原	松浦鸞洲邸	心月庵
浅草三好町	梅沢鶴叟邸	
橋場	青地湛海別邸	静和庵
本所横綱	安田松翁邸	又隠（写し）
向島小梅	徳川順順邸	嬉森庵
向島	八田円齊所有、香浮園	

13 所在地、所有者名は『東都茶会記』の記述を基本とし、高橋箒庵の日記『萬象録』等によって補った。したがって、所在地は住所の表記ではない。所有者名は本名の場合と、号によっている場合とがあるが、『東都茶会記』に従い頻出度の高い方を用いた。空欄は『東都茶会記』に記述がない箇所を示す。

14 『東都茶会記』が書かれた当時、東京市は 15 区の時代にあたる。当時市外であった品川や渋谷などの場所は、1932（昭和 7）年には大東京市 35 区に編入される。

これらの台地にある住宅は、市内では麻布区、赤坂区に多く、9箇所がある。宮城から一定の距離を取りつつ主に西側に点在するそれらの土地は、江戸時代は大名家を中心とした武家屋敷であり、例えば小見川藩内田家の上屋敷であった麻布内田山のように、かつての様子が連想できる名称もある。市外の住宅も、敷地の形状から見れば斜面を有し、市内のそれと類似している。台地における住宅は、御雇い外国人医師ベルツらが「高燥の地」を勧めたことなどを背景に、例えば皇族が土地取得に際しての希望として申し出ていることが指摘されており¹⁵、近代以後の居住地の理想となっていた。

一方、低地にある住宅の立地は四つに分けられる。すなわち都心に近い商業地、かつて大名屋敷・武家地であった築地周辺の東京湾に接した水際、閑静な風流・隠棲の地として知られた根岸、下屋敷を含む風流の地であった浅草・向島の隅田川に接した水際、である。これらはそれぞれ場所の性格が異なるが、いずれも江戸時代以来の伝統的な趣味人の住宅の立地といえる。

・東京の別荘地（表3）

東京の別荘地の住宅は、12箇所である。東海道本線およびその支線に沿って点在する別荘地は鎌倉、大磯、小田原、箱根、興津の計10箇所である。安島博幸、十代田朗は近代別荘を分類しているが、それによれば、鎌倉、大磯、小田原、興津は「海浜保養型」、箱根は「温泉保養型」といえる¹⁶。

残る2箇所は、国分寺と千葉で、東京郊外の武蔵野的な景観が得られる場所である。この2箇所は上記の分類によれば「近郊保養型」に属するといえる。これらはそれぞれ自らの趣味のためにつくられた別荘で、当時の富裕階層の別荘の一面をよく示している。

・京阪神およびその別荘地（表4）

京阪神およびその別荘地の住宅は、大阪市内5箇所、京都市内および近郊4箇所、六甲南麓7箇所、に分けられる。大阪市内は多くが中心部の商

表3 東京の別荘地における住宅

所在地	所有者、住宅名	茶席名
東京の別荘地で東海道本線およびその支線沿いにあるもの		
鎌倉	松方海東別邸、鶴陽荘	
鎌倉小町園隣地	中村作次郎別邸	好古庵
大磯	高田慎蔵別邸、相川館	
小田原	山県有朋別邸、古稀庵	
小田原	益田鈍翁別邸、掃雲台	閑雲亭、心曠亭
小田原	山下亀三郎別邸、対潮閣	
箱根湯本	野崎幻庵別邸	幻庵
箱根湯本	有賀長文別邸、岫雲社	
箱根強羅	益田鈍翁別邸	方丈庵
興津	井上世外別邸	
東京の別荘地でその他の地域にあるもの		
千葉猪鼻台	瀬川古堂別邸	幽松寮
国分寺	高田釜吉別邸	

表4 京阪神およびその別荘地における住宅

所在地	所有者、住宅名	茶席名
大阪市内にあるもの		
大阪網島	藤田平太郎邸	芦庵
大阪今橋	高谷宗範邸	楽只庵
大阪平野町	上野是庵邸	是庵
大阪茶白山	住友吉左衛門邸	好日庵
大阪東平野町	吉野五運別邸	塔々軒
京都市内および近郊にあるもの		
京都油小路	三井松籟邸	
京都田中	西園寺公望別邸、清風庵	
京都嵯峨	川崎芳太郎別邸	八賞軒
京都嵯峨野	林新助別邸	静庵
六甲南麓にあるもの		
西宮臥牛山	磯野良吉別邸、東山荘	皆松庵
芦屋	戸田露朝別邸	
摂津住吉	久原房之助邸	
御影	鈴木馬左也邸	自笑庵
御影	高谷宗範別邸、三影荘	撫松庵
御影	嘉納治兵衛別邸	月都庵
神戸布引	川崎芳太郎邸	川崎美術館、長春閣

15 鈴木博之『都市へ：日本の近代（10）』中央公論新社、1999、117頁
16 安島博幸、十代田朗『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局、1991、283-286頁

業地で、江戸期以来の居住地といえる。所有者は住友、吉野といった大阪の旧家と、地方出身者とが混在している。京都近郊の別邸の所有者でも同様の傾向が見られる。京都近郊は江戸期以来の京都の別荘地であるとともに、全国規模で見たときの伝統文化を感じる別荘地でもあった。

六甲南麓は大阪の郊外住宅地で、東京の市外西郊と同様に位置づけられる。ここで東京と異なるのは本邸と別邸とが混在していることであるが、この地域が大阪から比較的近く、別荘地として適した景勝地でありながら、同時に大規模な郊外住宅地としての位置づけがなされはじめていることが見て取れる。

以上が『東都茶会記』に見られる近代数寄者の住宅の所在である。次節で、その立地、建設、建築物の姿のそれぞれにおける特徴を見ていきたい。

3. 近代数寄者の住宅に見られる特徴

（1）郊外住宅と別荘

近代数寄者は、自動車での通勤を前提に郊外に住宅を建て、鉄道の利用を前提に別荘を建てた、もっとも初期の建築主である。

住宅の立地は、所有者の土地取得事情、生活観、風景観と関係していると考えられるが、『東都茶会記』に見られる東京郊外の住宅について所有者の職業との関係を見ると、市外の台地にある住宅は大半が実業家のものである。これは旧大名が江戸時代の屋敷跡を受け継ぎ市内に住んでいることや、維新の功労者はすべて市内の台地に住んでいることと比較すると顕著な傾向である。実業家は地方出身者で明治期以前には東京に土地をもたず、広い土地を得るには都心からある程度離れた場所でなければならなかったこと、彼らより一世代前のやはり地方出身者であった維新の功労者が「高燥の地」を求めたことになったことなどが考えられる。そして、低地の工業化、郊外の市街化にしたがい、やがては旧大名たちも郊外の台地へと移動していくのである。京阪神でも六甲南麓の住宅所有者は東京同様に実業家が多く、大半が地方出身者である。

郊外に住宅をもつことの利点は、なによりも広大な土地を確保できることにあろう。『東都茶会記』に見られる東京郊外の住宅としては、品川御殿山の益田鈍翁邸、千駄ヶ谷原宿の団琢磨（狸山）邸などが著名である。例えば益田邸、碧雲台は『東都茶会記』中の頻出回数が29回と極端に多く、その敷地内には、書院造の本邸のほか、接客用の洋館（コンドル設計）、バンガロー風の洋館（撫松庵）、応挙館（寺院書院の移築）、新座敷と呼ばれていた禅居庵（柏木貨一郎設計）、幽月亭（益田克徳設計）、太郎庵、為楽庵（田舎屋で木村清兵衛施工）、妙喜庵、無為庵、観楓亭、土足庵（田舎屋）など多数の茶席が併存していた¹⁷。高橋箒庵は、「本住宅の比較的宏壮ならざる割合に茶室の極めて多数なるは、

今日日本国中を通じて翁の右に出づる者なかるべし。畢竟茶室構造の工夫に富み、奇想が天外より落ち来たりて一室又一室、次第に其数を加へたる所以ならん¹⁸と書いているが、その広さは「二万坪の邸内」¹⁹とされ、小山の起伏ある地形に松原、梅林、楓林、竹林などがあり²⁰、そのなかに茶席が点在するという景観であった。これらの茶席を使い分け、少人数の茶会から茶席のすべてを使った大寄せの茶会まで、さまざまな催事が『東都茶会記』には描かれている。

また、近代数寄者が積極的につくったものに鉄道で行く別荘がある。ここでも広大な敷地と雄大な景観が目指されていた。例えば小田原の益田鈍翁別邸、掃雲台の景観は次のように描写されている。「濃茶一巡の後別業広間へとの案内に連れて、一同閑雲亭を立出で茂樹密林の間を縫ひ行けば、路は別荘庭前に廻りて右には双子山正面には真鶴岬の出で迎ふあり。眼界広闊、天地一変したるが如く、海山一眸の眺望殆ど名状す可からず。」²¹ここに描かれている視界の広さと高低の変化に富んだ景観は、東京郊外の台地でも求められていたものをさらに大きなスケールにしたものである。また、箱根では温泉を利用して、茶会の前に風呂を使わせる趣向が湯本の野崎幻庵別邸²²や強羅の益田鈍翁別邸²³において見られる。別荘としてのタイプは異なるが、国分寺の高田釜吉別邸は主人の趣味の狩猟のためにつくられたもので、「約六万坪の面積を占め、枯野、櫟林の間に亭々たる赤松、鬱々たる翠杉の散立する武蔵野の広漠たる趣を示して欧州大陸などの狩猟場に見るが如き光景あるは、高田君が此地を別荘に選定したる所以ならん」²⁴と描写されている。また、千葉の瀬川古堂別邸は医者である主人がかつて千葉病院に在職したことからつくられたもので、その景観は、「崖際の小高き丘上の四阿にて竹組腰掛を置き並べ、広闊なる一面の田圃中を汽車の折々往来する、将た漁村の横長く海岸に連続する、其末より松原越に遠く木更津の岬を見晴らす風景得も言はれず、古堂翁が此風景に憧憬れて、今度此地に菟裘を営みたるも亦偶然に非ずと思ひぬ」²⁵と描写されている。これらでも、ともに視界の広さが強調されている。関西でも、西宮の磯野良吉別邸では、高橋箒庵は用水池を含む「二万余坪」の土地の景観を賞賛し、別荘の名称を撰して、別荘名を東山荘、敷地内の池を鏡ヶ池、茶室を皆松庵と名付けている²⁶。

17 益田邸の形成については、鈴木邦夫「鈍翁コレクションのアルケオロジー」『鈍翁の眼 益田鈍翁の美の世界』五島美術館、1998、141-163頁で詳しく述べられている。為楽庵については、伊藤ていじ、横山正『現代和風建築集』第3巻、講談社、1984、10頁を参照。

18 前掲『東都茶会記』第3巻、291頁

19 前掲『東都茶会記』第2巻、228頁

20 前掲『東都茶会記』第3巻、227-261頁

21 前掲『東都茶会記』第3巻、32頁

22 前掲『東都茶会記』第2巻、106頁

23 前掲『東都茶会記』第3巻、293頁

24 前掲『東都茶会記』第5巻、81頁

25 前掲『東都茶会記』第4巻、105頁

26 前掲『東都茶会記』第4巻、147頁

郊外住宅や別荘は、建築主が都市から出ようと思わなければ成立しない。近代の郊外住宅と別荘の成立は、その時代に自然への接近を人々が求めていたからにはほかならない。ベルツらが勧めた近代の新たな価値観としての健康志向は、自然への接近の大きな要因であった。健康志向は当時のヨーロッパでの流行と同調したものであり、それは都市の急速な変貌と膨張とに深く関わっている。加えて、近代数寄者にあつては、自らの趣味にふさわしい環境として、自然への接近がはかられたという側面であろう。郊外住宅や別荘からの景観は、スケールの大きい自然景によって構成され、景観を特権的に所有していると感じさせるものであり、それは特権的な立地条件によって可能になったものであった。近代数寄者たちにとっては鉄道と自動車によって移動の自由が拡大したことで、潜在していた場所の可能性が顕在化し、都市では得がたい自然環境と、建築主の意識が照応するものとなったのであった。自家用車をもつほどの経済力のある人物たちには、各地の景観が住みうる場所として、きわめて意識的に見られていたのではなかろうか。

（２）移築と古材

近代の運輸・交通の恩恵を受けたのは人の移動だけではない。近代和風建築の形成にあたっては、材料の使用と移送が変化したことが重要である。材料から見て、和風住宅における近代化が見られるのは次の三点であろう。第一に、板ガラスや鉄など、それまでの木造住宅では使われることのなかった新しい工業製品を、取り込むことによって生まれた意匠と室内環境の変化に関することである。このことは、例えば洋小屋の採用など、新しい構法がもたらす変化とも関連している。第二に、国産の木材であっても、その流通経路と制度が拡大し、それまでにはない良材の入手が可能になったことである。第三に、移送が容易になったために、移築や古材の利用が容易になったことである。ここでは、とりわけ近代数寄者の住宅に特徴的な第三の点について、その造形的な特徴を考察しておきたい。

解体が可能であることは建築の保存に関する木造の特性である。解体が可能であるために移築が可能になる。移築は建物全体の構造を移すが、別の建造物の部分を部材として移した場合には古材の利用ということになる。移築も古材の利用も古くから行われていたが、その距離と数において、近代化の助けは非常に大きかった。

移築された建物は近代数寄者の間では茶道具の道具立てと同じように好みを示すものとして珍重された。例えば、前出の益田鈍翁邸内の中心施設であった応挙館は、愛知県海部郡の明眼院の書院にあった円山応挙の襖絵を建物ごと移したものであった（現在は東京国立博物館に移築）。また原富太郎（三溪）が1905（明治38）年から横浜・根岸に営んだ三溪園は、各地の建築遺構を広大な敷地内に配し、住居となる書院はもとより、寺社、民家、橋などあらゆる建造物を各地から集めた屋外博物館のような景観であった。さらに後述するように、古い民家を移築してつくった田舎屋は、近代数寄者が近代化を背景に生み出した茶室のタイプである。

古材の利用もやはり数寄者の好みを示すものとされ、大磯の三井八郎右衛門高棟の別荘には、古材のみから構成された久米権九郎設計のきわめて奇妙な建物がつくられていた²⁷。また、数寄者の間では庭石に伽藍石と呼ばれる古建築の礎石を用いることがもてはやされた。高橋箒庵の3軒目の自邸である赤坂一木町の伽藍洞とそのなかの茶室一木庵は、その名が趣味を示している。邸内の石はすべて伽藍石を用い、一木というのは法輪寺古材²⁸を用いた床柱を指し、それを所在地の町名にかけている。高橋箒庵は鉄道を使って奈良からこれらを運んだ²⁹。

移築や古材の利用は、唯一の材料を別の場所に移すということである。材料としての特質を考えた場合、移して保存する理由として、材料のもつ自然の形態を尊重するゆえに、複製が不可能なことが挙げられる。材料を同じものがふたつとないものと見なす考え方は、自然の形態の潜在的価値を生かすことへの重視につながる。この姿勢の反映として、材木の木目や艶といったことが意匠的に重要な意味をもち、材料の価値を決める要素になるのである。解体、移築が可能であることや、材料そのものが意匠的な価値をもつことは、木造ゆえの特徴といってよく、材料が均質ではないために複製が不可能で、構造の解体が可能なので再現は可能になることによる。移築における複製の不可能性と再現の可能性は、建築物の部分を見た場合の古材の利用についても全く同様に当てはまる。

木造における複製の不可能性と再現の可能性は、材料そのものの性質をデザインの要素とする価値観を生んだ。材料そのものの性質とは、適材を適所に用いるという材料に内在する構造的な、床柱や銘木の尊重に顕著な、ひずみ、ゆがみなどをも含んだ自然の形態のとらえ方、すなわち材料に内在する装飾性である。ここに求められるのは、材料を厳選する目と、自然に内在する造形を生かす技術であった。材料を選ぶということは、自然を選ぶということを意味し、材を産出する土地を選ぶということであった。

さらに、移築や古材の利用においては、材料という物そのものの価値から派生して、どこから、誰のものを移したか、という由緒による価値観が加わる。これは材料に歴史が潜んでいることを重視した価値観であり、多くの場合特別な人の行動や出来事によっている。好みというのが、もともと特別な人の好みが規範化したものであることを考えれば、故人や故事に思いを寄せる歴史の表象として建築物がとらえられていることを示している。エピソードの表象として建築物がとらえられ、それが価値付けられるのである。エピソードがない場合には、自らの審美眼に従ってエピソードをつくり、自ら価値付ける。こうした価値付けの過程は名物や名所の成立とよく似ている。

移築や古材の利用において求められるデザインは、すでに形のある建物や部材を、新た

27 『大磯のすまい(1):大磯町文化財調査報告書(37)』大磯町教育委員会、1992、191頁

28 前掲『東都茶会記』第4巻、340頁 なおこの床柱は、4年後に茶室の改築にともない興福寺古材に取り替えられている。『萬象録』第8巻(大正9年7月16日)、『大正茶道記』第1巻、448頁

29 前掲『萬象録』第1巻、68頁(大正元年8月29日)

な場所にどのように配するかである。その立地や庭との関係はことのほか重視され、デザインの主題は建物そのものの造形よりも、建つ場所の地形や自然条件を読むことにあり、またその関係づけにある。なかでも景観上の取り合いは重視され、例えば、高橋箒庵は茶室不審庵の写しを名古屋から向島徳川邸内に移築する際に³⁰、「其本歌たる」京都表千家の不審庵を見学に行き³¹、その建つ場所の景観を写すことで場所の性格を移そうとしている。自然の材料なり昔の建物なり、所与の形態に手を加えずそのままに用い、しかし、その構造的、空間的な配置を気遣うことは、所与の形態のふさわしい場所への定着をデザインの本質と考えていることを示すものといえる。あえて古びた材料を用いるのも、場所へのなじみを重視した一種の景観デザインといえる。場所へのふさわしさ、場所へのなじみを第一義と考える姿勢は、茶道具の取り合わせと似ており、移築や古材の利用は、数寄者の美意識を示すうえで、新築では得がたい価値をもっていたのである。

（3）施主と職人

鉄道によって土地と建設資材の選択可能性が広がるとともに、大工の技術や道具も伝播し、職人も移動するようになった。施主は理想の土地を求めて郊外住宅や別荘の建設に向かい、職人もそれに従って仕事の間を拡げるようになる。材料、道具、技術情報の流布は、建物の精度とデザインの質を向上させた。

特別な洋館を除いて、住宅は施主と職人によって建てられた。施主は自分の好みを職人に伝え、それを実現するのが職人の技術であった。そして好みにうるさい施主は自らの好みをわかってくれる職人を持っていた。施主たちは家を構想し、そして建てさせるのが好きだったのである。少数の者に許された特権的な趣味として、建築物や作庭の好みを示し実現させることは、自らの知識と美意識、そして指揮、監理能力を示す最高の方法だったといつてよい。建築や造園は土地や場所を変えてしまう行為であるが、そこで建物や庭を周辺に対してどのような佇まいを見せるか、そこに彼の教養人としての嗜みがあった。近代数寄者の住宅は、建築主の趣味に大工や庭師の技術が応えて成立したといえる。

近代数寄者たちには、それぞれお抱えともいえるような大工がおり、益田鈍翁邸内の禅居庵を1885（明治18）年という早い時期に手がけた柏木貨一郎（探古斎）や、団琢磨邸をはじめとした大正期の茶席を多く手がけた仰木敬一郎（魯堂）などは大工自身が高名な数寄者であった。そのほかには高橋箒庵の普請道楽を助けた木村清兵衛、京都南禅寺付近の数寄屋が有名な北村伝兵衛、住友家の八木甚兵衛などが著名である。

また京都の庭師であった七代目・小川治兵衛、すなわち植治は近代数寄者に愛され、山県有朋別邸無隣庵をはじめとした住宅の作庭を各地で行った。例えば住友吉左衛門友純

30 前掲『萬象録』第3巻、133頁、157頁、198頁等（大正4年5月26日等）

31 前掲『東都茶会記』第2巻、335頁、前掲『萬象録』第3巻、235頁（大正4年6月17日）

(春翠)が京都鹿ヶ谷に造営した別荘について、次のように伝えられている。「鹿ヶ谷を勧めたのは植治であつたと傳へる。小川治兵衛は早くから此處を用ゐるべき景勝の地と知つて自ら購つてゐた。」³²さらに、小川治兵衛は住友家との関係で、住友春翠の実兄であつた西園寺公望の京都別荘・清風荘、興津別荘・坐漁荘の作庭を手がけている³³。高橋箒庵は彼と20年来の懇意と伝え、箒庵の庭園が植治の作庭術に影響を与えたと述べている³⁴。『東都茶会記』でも、箒庵と植治は京都の鷹峰や大原を親しく巡っている³⁵。

しかしながら、小川治兵衛のように職人自身が動くのは特別な例で、むしろ広い影響力を持ったのは情報であろう。技術情報が広まったために、地方の職人でも質の高い構法や仕上げが可能となった。例えば坐漁荘の造営にあたつた地元の棟梁である塩津与三郎の遺品には、規矩術の本が残されている。こうして知識を得た優れた棟梁の存在が、景勝地の別荘など地方にあつても、質の高い建築の形成を支えていたことは疑いない。

近代和風建築という語を一般化させた村松貞次郎は、「明治の半ばごろから昭和へかけてのころ」を、「伝統木造技術の黄金時代」といつているが³⁶、その頂点をなすものが、施主の見識と職人の腕が重なり合つてできた近代数寄者の住宅にほかならない。

(4) 田舎屋の成立

近代数寄者は、別荘も含めて複数の住宅を所有しているのが普通だつた。それらはそれぞれ異なつた立地に応じて使い分けられ、建物の形もまたいくつかのタイプに分かれていた。これらのなかで和風のものだけを見ても、その形は多様であり、ひとつのタイプには収まりきらない創意に満ちているが、原型となるタイプは概ね三つに分けられる。すなわち、書院、数寄屋、民家である。ここではこの三つのタイプをもとに、近代数寄者の住宅の形をみておきたい。

第一の書院は、大規模住宅の和館など、もっとも一般的かつ日常的に使われる座敷であり、前近代からの格式ある屋敷の形式を踏襲したタイプといえる。御用邸の和館などもこの類例といえよう。典型的な姿は次のようなものである。屋根は寄棟または入母屋の瓦葺きで、真壁と羽目板張りの壁、縁回りに庇を回し、南面はほぼ全面にガラスを建て込んだ掃出の開口部でその内側に縁が回り障子が入る。このタイプに限らず、ガラスの存在はこの時期の建築の印象を決定的にする。平屋が基本で、室の大きさに応じて内部の天井は高い部屋もあり軒高はさまざまだが、概ね横に這うように建物は雁行し、棟の稜線をつなげた屋根で横長のプロポーションをつくる。特に実験性、新規性、装飾性などは目立たない

32 芳泉會『住友春翠』芳泉會、1975、562頁

33 西園寺公望は高橋箒庵とも親しく、高橋箒庵の茶室一木庵の扁額を揮毫している。前掲『東都茶会記』第4巻、260頁

34 前掲『萬象録』第3巻、239頁

35 前掲『東都茶会記』第3巻、415頁、第4巻、117頁

36 村松貞次郎、近江栄『近代和風建築』鹿島出版会、1988、7頁

ことが多い。

第二の数寄屋は、茶室と切り離せない住宅のタイプであるが、近代数寄者がいずれもこのタイプの住宅を所有していたわけではなく、住居としては書院を基本とし、本格的な数寄屋は茶室のみという例が多いように思われる。むしろ京都を中心とした関西の地域的なタイプとしての側面があろう。典型的な姿は次のようなものである。屋根はむくりのついた瓦葺きに、軒の先端を銅板葺きとして軒を薄く、真壁に杉皮張り、平面は細かく分かれ、坪庭などを取ってヴォリュームを分割し、浅く小さな庇を細かく架ける。数寄屋で目立つのは、材料のもつ自然の造形を生かした意匠である。書院が製材した材を用いることが多いのに対し、数寄屋では丸太や面皮が使われ、これらが空間に装飾性を与える。これに対応して、書院がいわば真の空間とすれば、数寄屋は行または草のたたずまいとなる。

第三に民家が挙げられるが、近代数寄者は新しい茶室のタイプとして田舎屋をつくりだした。田舎屋とは古い民家を移築し、それをもとに近代的な手を加えたものである。近代数寄者は茶会の道具立てを拡大し、武具や民具も用いたが、こうした物は新築の書院や小さなスケールで構成された数寄屋にはなじまず、古い民家の太く、粗く、大きく、黒い材料と空間が適当であった³⁷。真行草でいえば、草の空間といえる。近代数寄者の田舎屋は、益田克徳（非黙）が根岸に営んだ無為庵の待合いがはじまりであったとされ³⁸、その後、兄の鈍翁は御殿山邸内に土足庵、小田原別邸内に観濤荘、箱根強羅別邸内に白雲洞を建て、鵜沼別荘内にも漁師小屋があった³⁹。御殿山邸内の為楽庵もまた森川勘一郎が伝えるとおり田舎屋風の建築であった⁴⁰。また、団琢磨は千駄ヶ谷原宿の邸内に「小田原熱海間にありて数百年を経たる百姓家」⁴¹を移築し、仰木魯堂の手によって鼓腹亭として開き、これにちなんで団は狸山と号した⁴²。ここに見るように数寄者の間で珍重されたのは千年屋と呼ばれる古い家で、その古さを競うようなことも行われている。『昭和茶道記』の時代になるが、森川勘一郎は名古屋郊外に木曽川沿いの良材を使用した田舎屋を建て⁴³、これが原三溪のものと競い、益田鈍翁が森川のものに軍配をあげたという逸話もある⁴⁴。現存する例としては、前出の益田鈍翁別邸白雲洞や、松永安左衛門（耳庵）別邸であった柳瀬荘黄林閣などがある。

民家を基調としながら椅子座をも受け入れ、形式にとらわれない自由さがあってながら近

37 田舎屋の成立と空間性については、前掲『現代和風建築集』第3巻等で述べられている。

38 前掲『近代数寄者の茶の湯』203頁

39 前掲『萬象録』第1巻、206頁

40 森川勘一郎「田舎屋の茶」『茶道全集巻の1』創元社、1977（1936の復刻）、643頁

41 前掲『東都茶会記』第2巻、505頁、『萬象録』第3巻、410頁

42 『男爵團琢磨傳』下巻、故園男爵傳記編纂委員会、1938、365頁、ここでは小田原石垣山の麓から移したとある。団琢磨は仰木魯堂と組んで田舎屋のあり方を示し、この後箱根仙石原別邸や葉山別邸内にも建てたことが記されている。

43 前掲『茶道全集巻の1』644頁

44 高橋箒庵著、熊倉功夫編『昭和茶道記』第1巻、淡交社、2002、326頁

代的に洗練された表現をも取り込んだ田舎屋の空間は、ひとつの身分やしきたりに収まりきらない住まいとして、茶人だけではなく、よき趣味を共有する人物たちの住宅としてもつくられた。例えば文人趣味をもっていたことで知られ、高橋箒庵とも親しかった西園寺公望の御殿場別荘も田舎屋であった⁴⁵。茅葺き寄棟の大屋根に養蚕用の窓が取られ、規則的な出桁の持送りと柱の並ぶ真壁の下には瓦の下屋があり、建具には格子戸が填められていた。同じ御殿場には井上準之助の別荘として建てられ、後に秩父宮別邸となった田舎屋が現存している⁴⁶。

書院と数寄屋は、例えばガラス戸の使用など近代になって変化した部分はあったものの、基本的には前近代の格式ある住宅の形式と表現を踏襲したものである。それに対し、田舎屋の空間は、古い民家という既存の建物を素材としながら、古民家の発見、移築の経路、敷地へのセット、優れた職人による改装のすべてにわたって近代のロジスティックスを駆使することによって生まれた。そしてそこに客を招いて行われる催しは、主人の趣味を直接に表現するような、近代数寄者の豪快さを示すものであった。近代数寄者が生み出した田舎屋というタイプは、彼らの時代が過ぎ去って後も、世代や階層や規模を変えて、近代における住宅のひとつの理想型となっていくのである。それは姿としては近代化されざる種類の、近代化への抵抗の表現を見せながら、その実はきわめて近代化に依存して成立した住宅のタイプなのである。

4. まとめ

前節で、近代化が和風住宅の建築に与えた効果に注意しつつ、近代数寄者の住宅に見られる建築的な特徴を、その立地、建設、建築物の姿にわたって考察した。特に近代数寄者が積極的に行った、大都市郊外および別荘地における住宅建設、建造物の移築、田舎屋の造営という事柄は、住宅建設における局面は異なるものの、いずれもが近代化によって可能となった出来事であった。郊外・移築・田舎屋は、近代数寄者の時代と、その趣味から生み出された一連のトピックといえる。

郊外・移築・田舎屋を進めたのは、近代数寄者のなかでも特に新興の力をもった実業家たちであった。はじめ近代数寄者たちは、江戸期からの遺産を受け継ぎ、東京の場合でいえば、江戸時代は武家地か大名屋敷（上屋敷、中屋敷、下屋敷）であった場所に大半が住んでいた。かつて大名屋敷が存在した場所を自らのすまいとして選んだということは、彼らが扱った茶道具の多くが大名家から放出されたものであったことを考え合わせると、土

45 御殿場市文化財審議会編『御殿場の別荘』御殿場市教育委員会、1996、75頁

46 前掲『御殿場の別荘』32頁

地取得においても大名への憧れを実現していたと見ることができる。

ところが、近代化が進行し、市内の土地が手狭になると実業家たちは進んで郊外へと向かった。『東都茶会記』はちょうどこの過渡期の記録である。郊外で実現されたのは、今までにない規模の敷地と建物であり、形式の自由さを思わせる田舎屋での茶会であった。ここにおいて、近代数寄者の主導権は実業家たちが握り、彼らは前時代には存在しなかった、新たな住宅の理想型を示すこととなった。郊外や田舎屋において彼らが求めたのは、近代のツールによって可能になった、それまでの形式の延長にあるように見えながら、それからの展開を示すがごとき、新たなすまいの形式であったと考えられる。郊外の広い敷地が周囲からの制約を受けることが少なく、田舎屋の空間がさまざまな道具をのみ込むように、彼らは自らの意思で制御可能と信ずるに足る世界を築いた。あくまでも囲われた世界ではあるが、その敷地と建物のなかでは自在な驚きを見せることができたのである。このことは、茶道という形式に満ちた世界が、逆に形式の革新性を示すにはきわめて有効であることとも照応する。外国語を話し近代化を推し進めた一団が、数寄者と重なるということは、一見背反するよう見えるが、近代数寄者の住宅は、そうした一団であってこそその産物といってよい。彼らはそこと都心とを自家用車で移動するということまでやって見せた。実業家たちが住みはじめた東京市外の台地や六甲南麓、さらに当時の東京の別荘地は、その後の高級住宅地と一致する。近代数寄者たちの住宅は、前時代への憧れに基づいて土地を選び建物を建てることから、やがて展開し、近代のすまいの理想型となり、憧れを主導したのであった。近代数寄者の時代に少数の富裕階層のみに可能であった暮らしは、時代を経て、形を変えながらも、すまいのあり方として浸透していったと考えられる。現在も喧伝されている、自動車での移動を前提とした、古民家を移築した一戸建て住宅などのイメージは、近代数寄者の住宅に端を発するものではなかろうか。

謝辞

本稿は平成 18 年度科学研究費補助金(若手研究 B:課題番号 17760522)を受けた研究の一部である。

